

# 満蒙開拓青少年義勇軍女子指導員（寮母）を通して見る ジェンダー観及び性の社会的利用

02K042 大須賀 悠

## 1. はじめに

今年(2005年)の8月15日、日本はアジア太平洋戦争敗戦60周年を迎えた。私自身はもちろんその戦争の経験はない。だが、私の祖父母は実際にその戦争を経験した世代であるし、慰安婦の問題や靖国の問題でもわかるように、いまだ解決できていない問題が山積みだ。つまり、あの戦争は過去のことでなく、現在まで続いている問題なのだ。様々な分野での戦争の問題点を掘り起こし、追及がなされている。それは二度と同じことを繰り返さないために必要な行為である。なぜなら、人は過去に盲目であれば未来に対しても同じように盲目になるからだ。それを防ぐためにも、なるべく多くの切り口からアジア太平洋戦争を分析し、その問題点を掘り起こし、討議するべきであろう。その切り口のひとつ、ジェンダーによる視点もまた必要だ。ジェンダーとは、日本語では「生物的性差であるセックスの上に作られた社会的性差」として認識されている<sup>(1)</sup>。また、最近ではジョン・スコットが「男女の身体的差異に意味を付与する知、つまり、「性差に過剰な意味を見出して押し付ける意識や行為」とも解釈している<sup>(2)</sup>。

アジア太平洋戦争におけるジェンダー分析は今までさまざまな人によってなされてきた。特に、女は戦争で「被害者」としか認識されてこなかった事一石を投じたのは加納実紀代である。彼女は戦争における女性の加害性について問題を投げかけた最初の人物であり、彼女以降、戦争における女性の被害性のみでなく、その戦争責任も語られるようになった。愛国婦人会、国防婦人会、慰安婦、大陸の花嫁、皇国の母などなど、さまざまなカテゴリーの女性が分析されてきた。

しかし、こうした分析対象からもれた女性たちもいる。それが、満蒙開拓青少年義勇軍制度の中に組み込まれていた、満蒙開拓青少年義勇軍女子指導員、「寮母」である。私は祖母がその寮母の一人であったことを、大学の課題を通して知った。しかし、彼女たちに関する文献はほとんど残ってないといっている。同じ様に満洲へ渡った義勇軍や大陸の花嫁に関する文献はかなりの数があるにもかかわらず、寮母たちもまた、あのアジア太平洋戦争当時の社会における被害者であり、加害者であった。彼女たちの置かれていた当時の状況や、寮母に求められていたもの、その背景まで本来なら調査されていてしかるべきだ。ところが、それがなされていない。そこで、私はまずこれから、義勇軍の成り立ち、その性格、組織の様子、なぜ寮母が必要とされたかを論述したいと思う。そして、寮母とはいったいどういう存在だったのか、そして寮母となった人達は社会的にどういった状況におかれていたのかを、述べたいと思う。本論が寮母という存在に目を向けてもらえる発端となれば幸いである。

## 2. 満蒙開拓団から寮母まで一軍と農、憧れと屯墾病一

### 成人移民から少年移民へ

満蒙開拓青少年義勇軍女子指導員、すなわち寮母について考えるには、まず、寮母制度ができた背景から見なくてはならない。それには、満蒙開拓青少年義勇軍がどのような性質を持つものであったのかをまず考えてみる必要がある。さらに義勇軍の発生を見るうえで踏まえるべきことが満蒙開拓団である。なぜなら、義勇軍の母体となったのが満蒙開拓団であるからだ。この開拓団と、義勇軍の最も大きな差は団員の年齢であろう。満蒙開拓団は義勇軍と比して「成人移民」と呼ばれ、適正年齢も20代～30代とされた<sup>(3)</sup>。これに対して満蒙開拓青少年義勇軍は、その応募資格で年齢を「数え年16歳～19歳」<sup>(4)</sup>としてある。実はこの年齢の違いこそが、満蒙開拓青少年義勇軍が設立に至った最も大きな理由なのだ。

もともと満蒙開拓団は、日本国内の農村における過剰人口を解消し、満洲における日本人支配を確立させる目的で考え出されたものである<sup>(5)</sup>。満洲「植民地化」の為に日本人大量移入の必要性は、明治40年代から<sup>(6)</sup>認識されていたものの、それが実際に始動し始めたのは、昭和7年以降である<sup>(7)</sup>。というのも、大正3年の愛川村移民の失敗<sup>(8)</sup>以降、為政者の間には、「満洲への殖民は必要であるが、困難なもの」との感覚が広まり<sup>(9)</sup>、積極的に取り組もうとする者が出なかった為である。こうして一時放置された農業移民問題は、満洲殖民推進派であった加藤完治<sup>(10)</sup>と、「屯墾軍」の具申書<sup>(11)</sup>を石原莞爾へ提出した東宮鉄男が手を組むことによって再び動き始めた。

昭和7年秋に第一次開拓団が送出、三江省樺川県佳木斯(チャムス)の永豊鎮に入植したが、その半年後に騒動が起きた。第一移民団の幹部が突然、佳木斯(チャムス)に東宮を訪れ、幹部の更迭を要求する声明書と抗議文を突きつけた。その理由は、村の警備指導と関東軍・吉林軍への連絡・交渉の稚拙なこと、農機具計画の杜撰な事、農業指導の不良、幹部の横暴責任回避等だった<sup>(12)</sup>。このトラブルの背景にあったのが、屯墾病と呼ばれた一種の集団ノイローゼの発生である<sup>(13)</sup>。こうした屯墾病の発生、及び暴動の体験者として東宮は「第一次武装移民ノ精神動揺状況及第二次以後ノ人選ニ関スル要望」とした文書を発表している。その中で東宮は、屯墾病にかかわらず「意思堅固、困苦を厭わず、進んで難局に当り…警備に当たりても勇敢」だった者として以下の三者をあげる。「1 国民高等学校出身者 2 貧困者にして活路を満洲に求めんとして渡満せる者 3 純真の年少者」<sup>(14)</sup>。ここで出た「純真の年少者」という部分が、後の満蒙開拓青少年義勇軍につながっていく。

さて、実際に満蒙開拓青少年義勇軍が募集されたのは昭和13年だが、満蒙開拓青少年義勇軍は、以下のような要因が絡み合い、結成に至ったと考えられる。

- ① 加藤完治の思想「農業によって天皇に報いる」「教師も生徒も共に暮らす」
- ② 満洲国を支配するための100万戸送出計画
- ③ 先発の弥栄村(いやさかむら)、千振(ちふり)村(むら)に蔓延した屯墾病
- ④ 東宮鉄男の「年少ならば屯墾病にかからない」という考え
- ⑤ 国内の過剰人口の解消策として。
- ⑥ 成人開拓団では、移民する年代と、徴兵の年齢が同一期になってしまうため

特に、④の考えを立証するため、東宮は鏡(じょう)河(か)少年隊<sup>(15)</sup>と言うテストケースを作り、満洲に送り込んでいる。この少年隊は非常に好成績をあげ、地元民とも良く和したといわれたのだが、実際は襲撃事件があり<sup>(16)</sup>、それを恐れて外出もままならず、精神的にも逼塞していたようだ。だが、東宮、加藤完治、拓務省、さらにはジャーナリズムもその事実を隠し、満蒙開拓青少年義勇軍への布石としたのだった<sup>(17)</sup>。

### 義勇軍設立に対する政府の思惑

これをうけて、「満蒙開拓青少年義勇軍編纂に関する建白書」と題された文書が、加藤完治などの満洲移民推進派から政府に提出されると、異例の速さで具体化への道筋を辿る。建白書が提出されたのが昭和12年の11月3日、最初の義勇軍応募が開始されたのが昭和13年1月の「満蒙開拓青少年義勇軍募集要項」ができた直後からであるから、実質一年余りで実現されているのだ<sup>(18)</sup>。これには上記の義勇軍結成要因の⑤と⑥に関係した、政府の思惑がたいご絡んでいたようだ。それは、成人移民の挫折を挽回したいという思いだった。政府は満洲国を実質的な純粋日本人の支配下に置くために、昭和12年度から20年間で500万人の農業移民を入植させようとしていた。しかし、日中戦争の勃発に伴い、兵力増強が求められ、そこにあてがわれたのが、予備役、後備役の兵士たちである。彼らは現役で所帯を持った兵士たちで、その年齢は20代から30代が多かった。この層はまた、満蒙開拓移民としても適当な年齢層でもあった。ここで移民計画そのものがピンチとなるのだが、そこに上記の建白書が提出された。しかも、その中には以下のような件がある。

若しそれ刻下の情勢においてかくの如き多数青少年子弟の応募を期し得るや否やの問いに対しては、われ等は断じて憂うるの要なしと明言せん。なんとすれば、これを現在わが国人口構成の統計に見るに、満十五歳以下十八歳の農家子弟大約百五十万、その内郷土を離れてほかの職を求むるのやむなきもの約七十万を算す。(中略) なお幾多の青少年は農村に待機しつつあるのみならず、就職年齢(略満15歳)に達して離村すべきもの年々割く二十万を算す<sup>(19)</sup>。

これは、満蒙開拓に行き詰まった政府に対し、「青少年がいる」ということを示しているように見える。この部分がなければ、満蒙開拓青少年義勇軍の具体化はもう少し遅れたのではなかろうか。政府としては、日中戦争と日本人による満洲支配、どちらかが失敗すれば、もう片方も成功困難となるため、両者を同時に遂行・達成させなくてはならなかった。ところが、それが頓挫しかけた時にこうした建白書が提出された。政策の破綻を予防するために、政府はこれに飛びついたのではなかろうか。

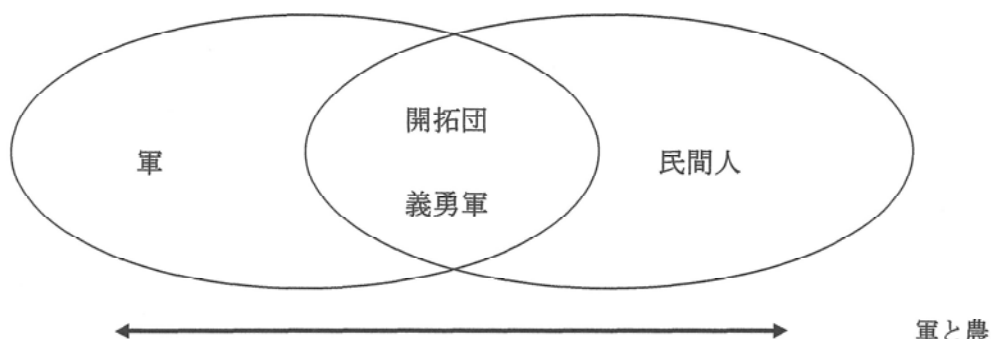


図-1

軍要素

民間要素

こうして義勇軍の募集が昭和13年から開始されたのだが、開拓団も、満蒙開拓青少年義勇軍も、構成に農学校としての毛色と、軍としての毛色が混ざっている(図-1)。つまり、民間と軍との役割の両方を期待されたのが開拓団と義勇軍であった。このことはその創設理念、履修内容をみてもわかるのだが、実際、元義勇軍兵士にもそう感じていた人もいたようだ<sup>(20)</sup>。さて、義勇軍の創設理念には農業、学校の色合いが強いが、内部構造、精神面は軍としての色が強い。いってみれば、軍の精神と構造を持った農業開拓団体と位置づけてい

いだろう。

例えば、創設の理念。これは建白書と募集要項を見ても、建白書のほうでは

満蒙開拓青少年義勇軍の目的は、わが国の青少年を編成して勤労報国する一大義勇軍とすることである。そのために、全満の各訓練所で、開拓訓練即教育、軍事教練即訓練となる現地の環境を利用し、日滿を貫く皇国精神を練磨させること。さらには、満洲農業経営に必要な知識技能を修練させること<sup>(21)</sup>。

と、このように言い、また募集要項でも前文において

わが純真な青少年諸君が満洲に渡り、大陸の新天地で農業を通じて心身の鍛錬を励み、成長してからは満蒙開拓の中堅人物となることは、小さく見れば青少年諸君の身を立てる為でもあり、大きく見ればわが国と、その兄弟国である満洲国との双方の発展に役立ち、ひいては東洋平和の礎を築くことになるのであって、これこそ男子としての大きな喜びでありましょう<sup>(22)</sup>。

と謳っている。建白書のほうでは、教育、訓練、練磨、といった言葉が並び、募集要項では鍛錬、農業、満蒙開拓の文字があり、どちらも農業、学校の色が強いことが窺える。

履修内容についても同じことが言える。生活面の上で、巡視などの自警訓練はあったが<sup>(23)</sup>、教育、訓練は

農業、教育の色が強い。満洲殖民問題、農産加工問題、日満史を学び、農業、道路、建築などの実習を行い、教練、剣道、相撲などの術科を行っていた<sup>(24)</sup>。こうした訓練のなかにも、皇国精神、大和体操<sup>(25)</sup>など、軍とほぼ同様のカリキュラムもあったが、皇国精神は軍特有のものとは言えないし、全体に見ればやはり農業教育に重点がおかれているといえよう。

一方、義勇軍の構造は、軍隊にならって作られたのだった。その構成はまず、所長の下に本部、本部の下に総務部、訓練部・警備司令部、そして第一から第五までの大隊が置かれていたのだった。一大隊の人数は1800名、その大隊は六個中隊から成っており、一中隊の人数は300人、5個小隊から成っていた。さらに、一小隊は60名、3つの班から成っていた。この班長と、小隊長は少年たちの中から選抜されたが、中隊長、大隊長には開拓指導員が就いた<sup>(26)</sup>。

義勇軍はこうしたはっきりとした上下社会で作られており、そのため、上のものには絶対服従となっていた。さらに、満洲奥地に入植した義勇軍は、厳しい訓練や戒律に加え周囲に娯楽のない状況、最悪の生活環境、そこから派生するいじめや、近隣住民への襲撃<sup>(27)</sup>などは、軍と共通する点であろう。特に、一つ上の先輩からの暴力は日常茶飯事だったという<sup>(28)</sup>。また、普通の学校と違い、訓練後も中隊長クラスが開拓地まで同行し、そこで村を立ち上げるシステム<sup>(29)</sup>も、軍に近いといえよう。

精神面が軍と近いというのは、「青少年義勇軍心得」の中に見て取れる。その中を見てみると、

- 一、古ノ武士ニ負ケルナ。
- 一、生命ヲ尊ビ、死ヲ恐レルナ。
- 一、規律ヲ重ンジ、命令ニ服セ。
- 一、武器ハ大切ニ手入レヲ怠ルナ。
- 一、農具モ武器ト心得ヨ。<sup>(30)</sup>

といった文句が並んでいる。そして中には「生命ヲ尊ビ、死ヲ恐レルナ。」<sup>(31)</sup>と言った矛盾するものも含まれている。

### 憧れと絶望—そして寮母へ

しかし、なぜこのように、農業と軍との要素が混じっているのだろうか。国内の余剰人口を解消させ、さらに満蒙を日本人が牛耳るためだけならば、農業のみの性質で十分である。軍隊の性質を入れることによって、どんな効果を狙ったのだろうか。まず対外的な理由は、もちろん、反満抗日パルチザンの襲撃に対抗するためだろう。実際に第一次の満蒙開拓団も、饒河少年隊も、襲撃を受けている<sup>(32)</sup>。それから、対内的な理由、というより効果だろう。狙ったものではないだろうが、「軍」の名称をつけることで、少年たちの憧れを喚起できた<sup>(33)</sup>。義勇軍に応募したのは、農民で、学歴も低いものが多かった<sup>(34)</sup>。さらに言うなら、貧農の次男以下が多かった。(私が今回聞き取り調査をした元義勇軍兵士のお二人も、どちらも次男以下であった。) 貧農で次男以下、学力もないとすれば、およそ想像できる将来像は、そうはかばかしいものではない。

みいんな長男が家継いでさ、それより下は以下同文でお前らどこへでも行けー

てなもんだ。おれあ頭も悪いらし、とてもじゃねえけど少年飛行兵、少年戦車兵、予科練の試験なんか受からねし…それで学校の先生から「お前優秀だから義勇軍の試験受けろ」って言われて。それで、募集案内見れば満洲へ行きゃあ20町歩の主になれるて言うし、牛乳は腹下りするくらい飲めるとか書いてあんだがね…<sup>(35)</sup>

元義勇軍隊員の一人は、自分が隊員となったいきさつをこのように語ってくれた。もともと彼の場合は、昭和20年の5月に渡満という、義勇軍制度最後の義勇軍の部類だ。義勇軍に対する憧れというものはなく、自分の意思で行ったというよりは、学校の先生の「命令」で行ったらしい。しかし、多くの少年、特に募集が始まった当初はなおさら、少年たちの目には理想の制度として映った。15歳から19歳の年齢は、まだ夢を捨てるには早い年頃であると同時に、現実もしっかりと見えている年頃である。こうした子達に、一石二鳥の策と受け取られたのが、「義勇軍」だった。未知の大陸、肥沃な土地＝地主への道。本にある軍人さんのような華々しい働きをすることができるかもしれない。現実的な解決法とヒロイックな願望が混ざった義勇軍は、少年たちに、まさに理想的な制度と映ったのだろう。義勇軍の応募資格が学力よりも健康に重点が置かれていたことも、多くの少年が応募するきっかけとなったようだ<sup>(36)</sup>。

だが、現実には少年たちの期待を大きく裏切る。満洲では衣食住がまず満身に確保されない。着るものはまだまじだっらしいが、食は、高粱を大量に炊き込んだ高粱飯だし、南瓜が採れれば二月でも三月でもそればかりだったという。加えて、水質が悪く、生水を飲んだものはアミーバ赤痢にかかったという。住の方は一応設備が整って、生活に不自由を感じないというところもあった一方、宿舎からして自分たちの手で建てなくてはならないところもあった。そういった所では、オンドルがうまくできないために凍死したものもあったという<sup>(37)</sup>。

こうした状況下、厳しい訓練や、規律、食事への不満などが溜まっていき、慢性化するのはごく当然である。しかし、それを解消できる娯楽の存在が欠けており、鬱病、後輩いじめ、中国人部落への襲撃などが多発した。特に女性へのレイプは殴打と同じくらいの頻度で行われていたと、上笠一郎は著書の中で言っている<sup>(38)</sup>。つまり、義勇軍制度存続の危機にまでなりかねない状況に陥っていたと推測される。そこで、少年たちに母性的な癒しを与える事でこうした状況を改善すると言う解決方法が見出された。それが「満蒙開拓青少年義勇軍女子指導員制度」であり、寮母という存在を義勇軍内に設けることだった<sup>(39)</sup>。

### 3. 「義勇軍には寮母」のカテゴリズ

#### 寮母の資格と「母性」

しかしなぜ屯墾病に陥った青年たちを救うのが「寮母」だったのか。寮母の三期生の募集要項、「満蒙開拓青少年義勇軍女子指導員（寮母）募集要綱」をみると、まずその趣旨で

是等青少年義勇軍は何分十六歳乃至十九歳の若年層の者でありますから、三カ年間の訓練中には家庭的情味を加えたる一面を有する教育方法を採用する必要がありますので、その方面を担当する即ち母性的教

育を任務とする女子指導員（寮母）の配置をすることになり、（中略）今回も左記要項により募集いたし、青少年義勇軍の為活動を願うことにしましたから、国策の線に沿って満蒙の天地に於いて日本女子の意気を発揮せんとする婦人は奮って応募せられんことを望みます<sup>(40)</sup>。

といっている。

さらに、その応募資格を

- イ、年齢三十歳以上、四十五歳までの寡婦又は独身者
- ロ、身体強健にして（呼吸器、循環器、泌尿器、神経等の疾患あるものの外、トラホーム、脚気、痔瘻、伝染性疾患のあるものは採用せず）性情公正、意志堅固にして女子中等学校卒業程度以上の学歴を有する者
- ハ、年齢三十歳乃至四拾五歳迄の寡婦又は独身の婦人にして女子中等学校を卒業せざるも人物性情衆の範となるに足る者は採用することあるべし<sup>(41)</sup>

としている。

要するに、青少年には家庭的な温かさが必要であり、それを与えるには年齢三十歳から四十五歳までの寡婦もしくは独身者、さらに体が頑丈で、学歴もそこそこ高く、強く寮母となることを望んでいる人が適しているというのである。体が頑丈、学歴が高いことなどは条件として納得できるが、なぜ、少年達の屯患病を治めるために母性なのか。また、その母性を与える人物がなぜ寡婦、独身者なのか。これらの疑問を解くには、当時の青少年の性に関するジェンダー観そして女のジェンダー観を見つめる必要がある。しかし、その前に、まず母性とはいったい何なのかを考えてみよう。

『広辞苑』で母性を引くと、「女性が母として持っている性質。また、母たるもの。」<sup>(42)</sup>と出る。さらに、母性愛では、「母親が子に対する先天的・本能的な愛情」<sup>(43)</sup>と出る。しかし、『女性学事典』によれば、母性はこう解釈されている。

女性が母として持っているものが何を意味するかは、母としてのどの側面を対象に考えるかによって異なる。H・ドイッチュは母性を“社会学的、生理学的、感情的な統一体としての、母の子に対する関係を示すもの”と定義した。しかし、一般的な母性観は、母性とは生理的機能と育児の適正が統合されて解釈される傾向にある。すなわち、子を産む女性は生来的に育児の適正も備えており、したがって母が育児に専念するのは古今東西を問わず子育ての心理だ、という母性観が広く浸透している<sup>(44)</sup>。

つまり母性というものは必ずしも女性の持つ生理的特長に付随するものではないのだが、育児は女の本能である、との解釈が一般的なのだ。しかし、「このことは普遍的な考えではなく、近代以降に誕生した考え」<sup>(45)</sup>なのだ。この生理的機能と社会的役割をイコールで結んだ考え方こそが、寮母制度発足の要なのだが、それは後述することにする。

## 青年を健全にと導く母の役割

次に、青少年とはいったい当事どのような存在だと考えられ、どういった姿が模範だとされたのか。義勇軍の応募資格を考えてみると、数えて16歳から19歳までの男子<sup>(46)</sup>。早熟な子ならこの年で性経験がある歳だし、性に関する関心も高い時期である。だが、『青年の性生活において』という本を見てみると、

性欲というものを満足させるのは、正当な結婚によってのみでなくてはならない  
ということ、また禁欲的要素を自らの中に持っているということを教えるべき  
だ。(略) 性欲と食欲を比べれば、性欲はそんなに強い欲求ではなく、意思の力で  
克服できないものではない。(略) 青年は、性欲は強いがそれを上回る意志の強さ  
を持っている。青年はすべて自分の中の性欲をある程度まで押さえ、正当なる結  
婚生活に入るまでは純なる童貞でなくてはならない<sup>(47)</sup>。

と、こうしたことが書かれている。つまり当時、青年も結婚するまでは清くなくてはならないという発想が見取れる。

他にも、大日本総合婦人会と、大日本総合女子青年団が編纂した、『結婚と婦人常識』という本を見てみると、

夫婦の性愛の浄化はもっとも大切なことで、放縦な父から生まれる子は純良ではなく、不義な快樂にふける母から生まれる子も、不良で純粋性を含んでいることは科学的に証明されている。(略) 結婚前の婦人にとって「私は処女であります。」と強く言うことのできるほど、愉快なことはない。(略) 処女が処女として貴い所以は、実にその純潔無垢にして汚濁されないという所にある。そこに処女の誇りが輝いているのである<sup>(48)</sup>。

と言っている。純良で、国の役に立つ「良い子」を産むには、まず夫婦の性愛が不純ではならないと言う。これもやはり、結婚までは清くあらねばならない、といった考えから来るものだろう。そして、「家族が健全であるためには、日夜犠牲の精神を、身を持って無言で示してくれる母の努力による。」<sup>(49)</sup> という部分からもわかるように、青年を清くあるように導いていく基礎がまず家庭であり、母である。ここで言う純良な子供、とは結婚によってのみ結ばれた夫婦間から生まれた、五体満足の子供であり、さらに、国のために命を落とす事に誇りを持つことのできる子である。つまり、私生児や、肉体、精神に欠陥のあるものは「不純」なのである。そして、家庭を健全に守るのは、母の役目であるのだ。これが義勇軍に寮母制度のアイディアが出てきた背景のひとつであろう。「子を清い方向へ導く清い母の存在の必要性」という考えであり、「義勇軍はまだ少年であり、その少年達が心身ともに健康であるためには、母の存在が必要である」と、屯瘡病の蔓延などで行き詰った義勇軍の上層部が考えたのではないだろうか。

そしてもうひとつ。当時、社会に貢献し金を稼ぎ、家庭を養うのは男の当然の義務。そしてその男に安らぎを与え、働く意欲を復活させること。そして二世を育てることは女の役割とされていた<sup>(50)</sup>。つまり、当時女は再生産の役割にこそその本分があると、政府は思わせたかった。それは満洲でも例外ではなかった。例えば、



屯墾病が発生した開拓団には、大陸の花嫁がいた<sup>(51)</sup>。レイプが多発した軍隊には慰安婦がいた。そして結婚する年齢ではないが屯墾病で多数の問題を抱えていた義勇軍には母親役の寮母があてがわれたのだ<sup>(52)</sup>。義勇軍の例を言えば、事実、軍内でも「寮母先生が明日は来る」というときには、隊全体がなんだか明るい空気に包まれたという<sup>(53)</sup>。

## 女の癒し効果

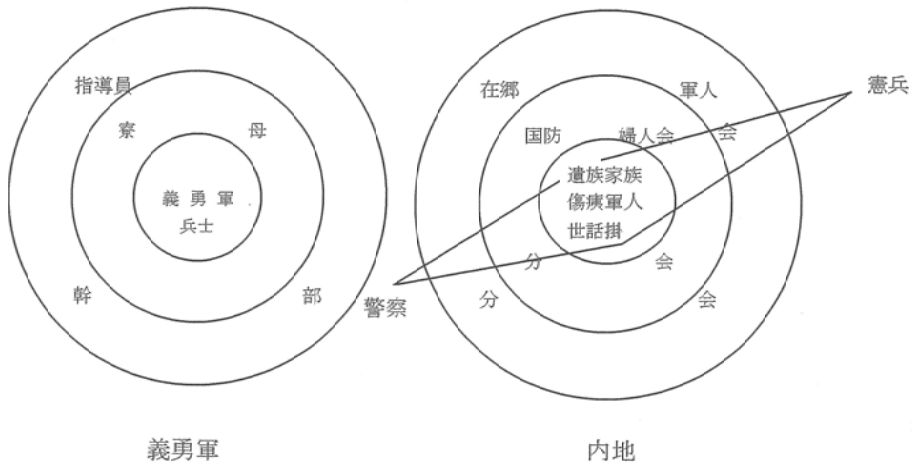
以下の表-1をみていただきたい。こうしてみると、満洲におけるどの女の集団にも、共通して「癒し」が求められていたことがわかる。が、それを与える女の種類と、その方法は異なるのだ。大陸の花嫁は、性的な快樂もちろんあるだろうが、それよりは、家庭を持つこと、子供を産むこと、さらには話し相手となることを通して、対等な立場で男を「癒す」のだ。慰安婦は、もっぱらその肉体での性的快樂で、しかも男よりは低い位置で男を「癒す」のである。そして寮母は、(女に母性が付随すると言う言説に基づいた上で成り立っている)母性で、具体的には、悩みを聞く、栄養管理、食事の世話をする、病人の介護をする、と言った方法で、男よりは上の立場で男を「癒す」のである。それは、義勇軍の少年たちが寮母たちのことを「寮母先生」と呼んでいたことからわかる<sup>(54)</sup>。寮母に、もと小学校の先生が多かった<sup>(55)</sup>のも、実際に同じくらいの年齢の生徒たちを教えた経験のある人のほうが上手く行くと思ったからだろう。

そして男が「癒し」を得る方法が異なるのも、社会的な枠組みにあったといえる。どの位置においても、全ての女は、戦争を実際に遂行する男たちをいかに生み出し、士気を高めるかと言う点に使われていたのだ。この構図を図式化したのが、以下の図-2である。これは、『大日本国防婦人会十年史』に載っていた<sup>(56)</sup>と言う図を元に義勇軍にも応用したものだが、これは義勇軍のみならず、軍や、開拓団にも同じことが当てはまるだろう。(義勇軍の場合、中隊長以上の幹部クラスが憲兵の役割も兼ねていたと思われる。)それぞれの役割を演じている役者の名前が変わるだけである。『女たちの(銃後)』で加納実紀代が「真ん中に傷病軍人や戦死者の遺家族、その周りを国防婦人会の女たちが取り巻き、さらにその外側を在郷軍人会の男たち、そして両端で、憲兵と警察がニラミをきかせている」「反戦、厭戦の発生地となりやすい傷病兵や遺家族を監視するのに、警察や憲兵といったむき出しの権力ではカドが立つ。あたりのやわらかい女たちをクッションにして抑えこもうというわけだ。」<sup>(57)</sup>と分析した事が、そのまま義勇軍、ひいては開拓団や軍隊にも当てはまるのだ。

表-1

集団名	満蒙開拓団	軍	義勇軍
女の名称	大陸の花嫁	慰安婦	寮母
必要とされた女の能力	純潔日本人の生産	性的快樂	母性
社会的な種類	癒し 嫁	癒し 娼婦	癒し 母親

図-2



満洲は当時の日本にとって新しい地であり、そこで作られた開拓団や義勇軍も新しいものである。これら組織はどれも最初男だけで構成され、男だけで、「天皇の大御心」に沿うように機能させようとする。しかし、実際は屯墾病など様々な問題が起きる。それを男だけで解決できず、「大御心」に沿えないような事態が起きたとき、その解決方法として女が利用された。つまり、男性的な厳しさだけではうまく行かなかったから女性的な優しさを以って処理しようという論理だ。結局どの分野においても、日本の枠内にいる限りは、このジェンダーカテゴリーから抜け出すことはできなかったのである。

少年たちという年齢層に対する感覚と態度の規定化、そしてそこから発生した「癒し」の一手段としての代理母の必要性。この二つのことを背景に、おそらく義勇軍関係者たちは次のような考えで寮母募集にいたったのではないだろうか。

- ① 義勇軍の青少年達が屯墾病にかかり、その一部では性が暴走している。
- ② 男性的な、厳しさでは、それを抑えることができない。
- ③ となると、女性的なやさしさ、癒しによる指導が必要だ。
- ④ 青少年たちはまだ結婚する年齢ではないから、性欲を満足させるために慰安婦のような女をあてがうわけには行かない。
- ⑤ 家庭的なやさしさを青少年に与え、導いていける母や姉的な存在がほしいのではないだろうか。
- ⑥ 実際に慰問袋や、慰問文に生徒たちは自分の本音を言っているようだ<sup>(58)</sup>。
- ⑦ 饒可少年隊<sup>2</sup>にもいた、寮母という存在がいるといいのではないか<sup>(59)</sup>。

#### 4. 女のリサイクル

こうした考えで寮母の募集が決まったのであろう。しかし、ではなぜ募集要綱では寡婦または独身者となっているのか。家庭的な優しさや、温かさ、母性を与えることが目的なら、実際に結婚し、子供を持っている人、もしくは育てたことのある人の方が適当だと考えられるのに、である。応募条件の年齢と時代を考えると、寡婦であっても子供がひとり立ちして来るという人はまだ少ないのではないか。となると、大方が子供を生んだ経験のない女であることが予想できる。なぜ、寮母の募集要項を定めた義勇軍の幹部は、その応募資格を「独身、または寡婦」としたのであろうか。

こうした疑問を解くには、当時の女の結婚についてのジェンダー観を今度は見る必要がある。再度、『結婚と婦人常識』という本と『青年の性生活』という本を見てみる。前者では「早婚にも弊害は及ぶが、あまりに遅いものも弊害が甚だしい。27歳がその限度である。」と言っている。『青年の性生活』のほうでは、「女子が何かの事情によって長く結婚しないている、いわゆる老嬢というものは、どうかすると極めて冷酷に、陰険になりやすい。」<sup>(60)</sup>と言っている。こう羅列していくと、男も女も結婚するのが当たり前、そうすることで人間は一人前になるという風潮が見て取れる。また、女に関しては、いつまでも結婚しないことは人格に問題をきたすようにも捉えられている。

では、結婚した後、女はどうあるべきだったか。妻の役割というものを、引き続き『結婚と婦人常識』そして『完全なる夫婦道喧嘩四十八手』という本から見てみる。すると、「女の社会的活動もいろいろ、それはまず、家庭内の雑事をすべてこなしてからのことだ。」「主婦たるもの各方面に趣味を養い、家庭を安息所にしなくてはならない。」<sup>(61)</sup>「妻はよき家政婦、夫にとつての恋人、母、娘でなくてはならない。」「例え夫が弱く、頼りなくても、夫の陽的屬性を十分発達させるように影ながら支えることが肝要」<sup>(62)</sup>と言った記述が並んでいる。つまり、結婚した女の第一にしなければならないことは、家を守ることであり、それができて初めて社会的な活動が認められるような状況だったと考えられる。妻となった以上、最優先事項は家庭を切り盛りし、夫を励まし、安らがせ、子供を育てることが、女の果たすべき最優先事項であったのだ。

この考えはまさしく、上記した女性の生理的特徴と育児の適正をイコールでつないだ結果、出てきた考えである。そして生理的作用で言えば、「子供を産むことができる」という可能性で元々はあったはずの論理を、「女にしか子供は産めない」、「女は子供を産むべきである」といった強迫、義務といった論理に転換していったのだ。さらに、「子供を産める存在はその本能として子供を慈愛する気持ちを持っている」という言説が重なり、「女の第一の役割は子供を産み育てること」という考えになり、さらにそこから発展して「女の社会的役割は男の補完にある」という論理に発展したと考えられるのだ。こうした性別による役割分担は、政府が戦争を遂行する上で都合の良いものであった。生まれ持った性別を軸にした倫理的規範を作って「それが理想だ」「性差によって自らの適性も生まれながら規定される」と国民に教え込む。

こういった生物学的な差を、社会的適性の差にまで拡大すると、外見でその適性がわかる。さらに、人間は規範があるほうが考えなくてすむ。しかも、その規範が権力や権威によって提示されたものであるなら、疑問を持つものはごく少数になってくるのではないか。つまり、みながすんなりと、提示されたモデルに習おうとすると、政府にとって都合のいい人間だけを育てることが可能なのだ。つまり、多様性をなくすほど、人間は操作しやすくなるのだ。さらには、モデルに合わないといった理由で異質な存在を排除しようとする。ここまでくれば、権力、権威の提示した規範を内在化している為、最初の理想像を人間は自ら固めようとしていく。

後は、ここから漏れた人間をどう扱うかにかかってくる。なぜなら、そこは不満が噴出しやすいところであり、作り上げたシステムに反乱する革命の温床になりうるからだ。そして、当時この温床にあたる存在と考えられた一つが、社会の「結婚しろ」、「子供を産め」という要請に応えず、いつまでも結婚しない女であったのだ。彼女たちの再利用場として、また再度政府の管轄に組み込む手段としての側面も、寮母制度にはあったのではないか。事実、寮母に応募した人達は聖和学園と内原で徹底的に軍がイメージする「母」像を学んでいく。剣道や、明治神宮への参拝があったというが<sup>(63)</sup>、それも皇国精神を身につけさせ、さらにそれを義勇軍へも広めていくためであろう。国の役に立たない女をこの場所で再教育する、つまりリサイクルするわけだ。性別分業の考え方に基づいた、①女も男も結婚するのがあたりまえ。②結婚したら女は子を産み家の仕事をする。この二つの考え方が、おそらくは寮母の募集を「年齢三十歳以上、四十五歳までの寡婦又は独身者」にした理由ではないだろうか。そしてこの制度は当時「負け犬」だった女たちにとって、自己実現の場として捉えられたのだった。

## 5. 寮母となった女

### 負け犬

実際に寮母をしていた人の回想をいくつか見てみる。彼女たちはいったいどういった心境で満洲に渡ったのか。(寮母に関する資料自体が少ないため、直接の聞き取りと、一冊の元寮母、上条なつによる手記『道ありき』からの推測になる。)

私の祖母、山口(旧姓今井)明子の場合を見てみる。(ここでは旧姓の今井の方を主として使うこととする。)山口(旧姓今井)明子、大正4年1月26日生まれ。最終学歴は高等女学校。21歳の時に嫁いでいるが、嫁ぎ先で結核をうつされ離婚されている。その後、実家で結核の療養をしていたが24歳の時に比叡山で行われたの全国仏教成年大会に参加、そこで、彼女は「時代の変化を感じ取った」らしい。そして「こんなところでぐずぐずしている場合ではない、と思った。どうやら、ここで寮母の話を目にしたらしい。そして新聞でも寮母の応募を確認し、親に内緒で申し込んだ。と、言うのも、親はもう一度嫁にやりたかったらしく、いくつか縁談が来ていたようなのだ。しかし、最初の結婚生活は、彼女にとってはとても窮屈なもので、「自由に話すこともできない。夫とも話が合わなかったし、自分はただの人形だった。」と語っていた。こうしたことから、結婚に対して絶望してしまったところがあったのだろう。また、彼女は「1年半ほどの結婚生活で、子供ができなかったから、自分はひよっとしたら子供を生めない体じゃないかと思った。それなら結婚してもだめだと思った。」とも語っていた。(こうしたところに、今井明子自身も当時のジェンダー観を自らのものとして持っていたように見て取れる。)

当時は、女は子供を産んでこそ一人前なのだ。それも結婚によってでなければならぬ。なぜか。国が管理できない子、つまりは兵士とならない子は不可なのである。さらに、結婚もしない、子供を産めない=兵士を作れない女は役立たずであったのだろう。

前述したように、今井も離婚して実家に帰ってからもいくつか縁談があったと言っていた。上条なつも寮母になったのだが、彼女の場合は満洲から帰ってきてから、縁談が次々にあったという。親こそ何も言わなかつ

たものの、近所の人や親戚が婚期の過ぎた娘を憐れんで次々と縁談を持ってきてくれたという。しかし、気乗りしない上条の態度に怒り、「親切に言ってやるのに義理も思も知らん娘やなあ。おなつちゃんは一体いくつになるまで若いつもりでいるんや？」と、面と向かって言われたりもしたという。また母や兄にも「肉親のくせに親身に考えてもやらん心なしの親兄弟や」と、非難中傷する人も少なくなかったという<sup>(64)</sup>。何が何でもまず結婚という当時の考えを、こうしたところからも見ることができる。これに抗って生きようとすると、肉親にも世間の厳しい目が向けられたのだ。こうした状況を挽回できるのが、寮母となることだったのだ。

### 自己実現としての寮母

まず、今井明子が寮母に応募したきっかけ及び理由を聞いてみると、「離縁されて後、実家で結核の療養をしつつ慰問袋や、兵隊への慰問をやっていた。その一環の、慰問文が義勇隊の青年のところへ行ったら。その返事で、親にも言えない辛さを言ってきた。それを見て、『こんな子達が行っているなら、この子達の母、姉役が行かなくては、女の歴史的な恥だ。』と言う気持ちになった。」そして「その子達のためになるなら、生きがいがあると思った。」と言っていた。つまりは、それまで今井は生きがいを持っていない状態だったのだ。寮母に応募すると移住協会から役人が来て、面接を受け、合格すれば東京の聖和学園というところで、そしてその次に茨城の内原訓練所で約5ヵ月間の訓練を受けたのだった<sup>(65)</sup>。

実際に、東京、聖和学園での訓練と内原での訓練はどうだったか聞いてみると、「大変だったけれど、お飾りだけの結婚生活よりは遙かにまし。自分の居場所があった。体を張って目的を遂げる喜びがあった<sup>(66)</sup>。」と言っていた。募集要項の中にある修学科を見てみると、日本精神、婦道、満蒙開拓問題の認識を深めること、栄養、看護、防疫、衛生、作法等、さらに日本(やまと)体操(ばたらき)、農業実習など多岐にわたる<sup>(67)</sup>。これらを半年の間にマスターしなくてはならないのだから、その訓練がどれほどのものだったかは想像に難くない。その上、毎朝の明治神宮への参拝、武道館で剣道の訓練もあったようだ<sup>(68)</sup>。この訓練では、第四期生は初め100人いた応募者のうち30人しか残らなかつたらしい<sup>(69)</sup>。こういった厳しい訓練を耐え抜いて寮母となった人達というのは、内地から脱出したいと、非常に強く思っていた人達だったのではないだろうか。

今井の証言を聞いてみた時にわかる事は、今井は当時の性役割分担観に違和感を抱いていたであろうということだ。おそらくは、そうした「常識」にどうしてもなじめない自分自身を責めたこともあったのではないかも知れない。しかし、そうした「常識」を受け入れることのできない自分もいる。こんなジレンマの状態に、離婚後今井は置かれていたのではないだろうか。そんな今井にとって、義勇軍の寮母という仕事は、たった一つに救いに見えたのだろう。「自分は思うように生きられるのでないかも知れない」今井はそう思ったのだろう。また寮母となった他の人たちも、こうした心境だった人が少なくなかったはずだ。

今井の例とは少し異なるが、上条なつも寮母の募集を自分の運命の転機として捕らえている。彼女の手記によると、彼女は大正2年8月に、和歌山県日高郡岩代村に生まれた。高等小学校と、補習科を卒業した後は、母の病気を治す為に大阪に出てきた<sup>(70)</sup>。そこで奉公に出るのだが、その家の主人から肉体関係をせまられたり、下種に言い寄られたり、失恋したりと、3回奉公先を変えている<sup>(71)</sup>。こうした奉公先を点々とする一方で、母の病気を通じて彼女は看護婦になりたいと思うようになる。その後産婆の資格をとるものの、医者になりたいという思いは捨て切れなかった。医学学校に働きながら勉強できる方法がないかアドバイスを求めたところ、「そのような無理な学業は容易なことではない。あなたには産婆の資格があるのだから、その方に専心

努力したほうがはるかに賢明な策だ」と言われる。そしてしばらくは働く気力もなく、ぼんやりとしていたという。そして、「この仕事を運命と思って、その日を悔いなく生きることを自分の生きがいでと考えよう」と思った<sup>(72)</sup>。

そんな時に、新聞上で「大陸の母、満洲開拓義勇軍寮母募集」の文字を見つけた。新聞には、義勇軍寮母という仕事は、「少年たちに母として姉として優しい気持ちで愛情と励ましを与え、一面生活指導も兼ねた暖かい手を差し伸べるために入植し、彼らと起居寝食を共にする。そして落伍者を一人でも少なくし、一方仕事の能率をさらに高めようという重い使命のものに新しく発足した職業」と、説明してあったという。彼女はこの記事に心引かれ、何度も読み返した。その時上条なつは自身の心境を以下のように回想している。

心はあやしくふるえ、我が身の神々しく活躍する姿を思い浮かべた。そして、国家のために、また人のために尽くすのは、何も戦場に限ったことではないんだ、そうだおもいきって渡満してみよう、そして人間的な愛情のもとに、この少年達と共に暮らしてみよう、そう思い立つともう矢も立てたまらなくなり、母のことは兄に頼み、早速実行に移すことにした<sup>(73)</sup>。

上条なつの場合にも、寮母募集の案内を見たとき、今井の時と似たような心境だったのではないかと推測できる。二人とも寮母募集に出会うまで、無力感、挫折感にさいなまれていたと思われるからだ。今井の場合は、結婚、離縁に伴う、自分の存在意義への疑問。そして上条なつの場合、一大決心で決めたキャリアアップの道が開ざされたことによる挫折感。こういった感情が、寮母の募集に出会ったとき、解消されるようなイメージを二人とも抱いたのではないだろうか。さらに、義勇軍の実態を少しでも知っていたこと、そして兵として召集されていく人達を見たことが、その気持ちに拍車をかけたのではないだろうか。

今井の場合は、前述したように義勇軍からの手紙（慰問文の返事）で義勇軍の実態を知った。上条なつの場合、自宅から何回も出征する兵士たちの様子を見、「これら戦場に赴く若い人々をみていると、内地で安閑としていることは何か申し訳ないような気がして、私もできることなら戦地に行き、傷ついた人々を看護してあげたいと言う思いが大きく頭をもたげ、私の小さな胸は何とかしてその機会に恵まれたいとあせっていた」<sup>(74)</sup>と言う気持ちだったと述べている。

どちらの場合も、義勇軍を通じて自分のやりがい、生きがいが見つかるかもしれないという思いだったのだろう。他の寮母たちも少なからずそうした思いを抱いていた人が多かったのではないかと。未亡人や、失恋した人などが寮母に多かったという証言<sup>(75)</sup>も、こうした背景があったのではないだろうか。当時の満洲は、寮母、義勇軍の少年たちどちらにとっても新天地であり、自分の希望が叶えられる素晴らしいところだというイメージが蔓延していたのだ。寮母になった女性は当時のジェンダー規範からはみ出した存在であり、非難される存在だったものがほとんどである。それが、ここにきて一転して自身が「モデル」となれたわけだ<sup>(76)</sup>。「お国のために」とまでは思わなくとも、少年たちのために尽くそうという気持ちは、嫌が冗にも高まったのではないだろうか。（出征兵士の見送りの構造と同じである。）

## 6. 越えられなかった国の枠

### 渡満後

渡満した後は、それぞれの訓練所へ寮母達は移る。今井明子の場合は、ハルピンだった。ハルピンや、勃(ぼつ)利(り)と言った大きな訓練所があるところでは、寮母たちは寮母たちで、宿舍が与えられていたようだ。今井は、8人の寮母と一緒に生活していたと言うし、勃(ぼつ)利(り)では一個大隊や三個中隊くらいのまとまった所に三、四人がいて、中隊を巡回していたらしい<sup>(77)</sup>。しかし、大きな訓練所と違い、小さな訓練所では中隊一つきり、そして寮母も一人だけ、というところもあったようだ。おおよそ寮母は200人から400人に一人の割合で配属されたようだが、これほど大人数の男子集団に対して女一人というのは、少々無理があるように思われる。上笠一郎も、「寮母の配属のされ方や、受け持ち人数には無理があった」<sup>(78)</sup>と分析している。

今井も、300人の生徒を受け持ったらしく、一番大切なことは、「えこひいき」をしたと思われぬようにする事だと言っていた。朝礼でもみんなの顔を見渡すのだが、「平ら」な顔をするようにするのだと。「あいつのことは長く見てたのに、俺のことは見なかった」と言われぬようにするのだ、という。今井の場合は、大訓練所に配属され、寮母仲間もいたこと、ハルピン市内に出れば、娯楽と呼べるものもあったことなどもあり、うまくなじむことができたようだ。日本に帰りたいとはぜんぜん思わなかったというし、寮母の任期が終わったら次は大陸の花嫁の斡旋をやるうかとも考えていた<sup>(79)</sup>。

しかし、今井とは対照的に、上条なつは適応できずに内地に帰ってきてしまった。彼女の配属された場所は、ソ満国境沿いの、小訓練所であったようだ。彼女は300人の男の中で女一人という状態でまず孤独を感じる。生徒たちが上条を慕うようになって孤独が和らいできたかと思うと、今度は隊員の誰かと一緒にいるだけで「みだらな言葉や聞くに堪えないワイセツな歌」をあびせかけた。さらに、生徒の死や、自身が夜半生徒に襲われかけるという目にも会い、結局は内地へと帰ってきてしまうのだ<sup>(80)</sup>。上条なつの例は、寮母制度が失敗した例だろう。しかしどうやら、寮母たちは概ね、訓練で教わった通りうまく「母役」を演じたらしい。しかし、寮母を「母」とは認識しなかった生徒もいた。

### 国の枠内での成功と挫折

こうして見ると、今井明子は成功者で、上条なつは敗北者のように見えるかもしれない。確かに、今井は満洲で自分の生きがいとも呼べるものに出会えたかもしれない。しかしそれは、内地で彼女が自由に生きることができなかったシステムを作り、維持していた国家の枠内での自己実現、それも、日本が他国を侵略する手伝いをするこでの自己実現だったのだ。国家が始めた戦争によって強化されたジェンダー枠組にそって思うように生きられず、やっとそれができると思えば、国家の枠内での自己実現。国が求める理想像に自分を当てはめ、国の役に立つ、他国を侵略する人間を養成する仕事。つまりは、自己実現が自らを圧迫していたジェンダー枠組を強化する方へと動いてしまったのだ。それでも、内地よりは自分らしく生きていけた。しかし、敗戦。それからの逃避行で辛酸を舐め、帰国。するとまた、元のジェンダー規範を求める社会が待っていた。今井明子の場合、帰国してからしばらくして、結婚、私の伯父と父を出産しているが、夫を亡くし、その後も苦勞をしている。上条なつも、前述したとおりでさんざん縁談を持ちかけられたが、断り続け、医者を目指した<sup>(81)</sup>。また、寮母の第一期生だった一人、徳江マサという人は、戦後縁談もあったがその気になれず、義勇軍で連れて

帰ってこれなかった人達の冥福を祈りつつ、一生独身で亡くなったという<sup>(82)</sup>。義勇軍も、寮母の制度も、成功しても失敗しても誰かが傷つき、犠牲になるという制度だった。

そして一番問題なのは、もと義勇軍も、寮母もそのことに気がつかず、今まで来てしまったということだ。「敗戦のごたごたで」という名目の下、国は説明責任を果たしてきていないし、十分な補償もなされていない。今井明子は10万円ほどそれでも金を貰ったし、元義勇軍兵士の長田末作の家には国からの慰労の賞状が飾ってあった。一が、その程度のものだ。「みんなあの戦争では大変だった」そういった感覚で終わらされてしまっているのだ。

## 7. おわりに

寮母としての経験は、彼女たち個人としては、大変だったけれども、あれがあったから今の自分がある、で済ませられる問題だろう。しかし、社会構造は何も変わらず、人々は何も反省もしていないのではない。寮母だった人達は、内地では自己実現ができず、満洲に望みをかけ、海を越えた人達だ。しかし結局国家が課した枠を超えることはできなかった。そればかりか、自らを圧迫していたジェンダー規範を強化する方へと動いてしまった。そして敗戦後、彼女たちの夢は壊れたが、ジェンダー規範は存在し続け、再び彼女たちを圧迫したのだ。戦後60年、こうしたジェンダー規範はようやく緩んできたかと思えば、またきつくなりかけているように私には思える。それはなぜか。戦争経験の表面だけをみて、その根本を問いただせなかったからである。寮母の経験や義勇軍の経験は、一個人の「あれも経験」という中にとどめておける問題ではないのだ。

なぜなら、それで済ませてしまえば、また再び同じことが起こる可能性があるからである。個人的な経験や、感情というものは、時代とともに風化しやすい。現に、今寮母の存在、及びその経験というものはほとんど忘れかけられている。そうさせてはならないのだ。私のこの卒業論文で、満蒙開拓青少年義勇軍女子指導員—寮母の全てが説明できているとは思わない。しかし、ほとんど忘れかけられていた寮母の存在にスポットをあて、議論の場に出したことは自体は意味のあることだと思う。

戦争とは、差別の構造とは、ある日突然できるのではない。日常から少しずつ、こっそりとわれわれの生活、心に進入してくるのである。そしてそれは次第に巧妙になってきているように思われる。まして戦後60年、社会の構造、特にジェンダー枠組はほとんど変化していないのだ。いわば、私たちは産まれた時から明治以降に作られ、昭和で完成、強化されたジェンダー観に浸って育ってきたのだ。なかなかそれを批判するのは困難だろう。しかし、それを怠れば、システムに違和感を持ちながらもシステムに加担するような寮母と同じような存在を作り上げるのではないか。それを防ぐ一番有効な手段は、過去の経験を分析すること。そして問題点をしっかり見つめて、元から改善することだろう。歴史とは、現在をより良くする為に存在する。また、戦争被害者に十分な保障、及び説明責任がなされていないこと、戦争を遂行するために作られたジェンダー規範がいまだに残っていることから考えると、アジア太平洋戦争は決して過去の事ではない。それなのに、もう風化しかかっているのだ。そうさせないよう努力することが、ひいては自分たちの生活、命を守る事になるのだと、声を大にして言いたい。



## 註

- (1) 井上輝子、江原由美子、加納実紀代、上野千鶴子、大沢真理編『女性学事典』 岩波書店 2002年p.163.
- (2) アルザ新島主催講座「憲法を変えて戦争に行こう、という世の中にしないための7回講座」  
第2回「女は戦争の被害者か」において講師 加納実紀代によって配布されたレジュメより、2005年 井上輝子他編  
Ibid., p.295.
- (3) 上笙一郎 『滿蒙開拓青少年義勇軍』中公新書 1974年p.41.
- (4) Ibid. p.43.
- (5) Ibid. pp.12-14.
- (6) Ibid. p.12.
- (7) Ibid. p.19.
- (8) 大正3年、関東都督福島安正大将の世話で実現。関東州の大魏家屯付近に山口県愛宕村と下川村の農民集団が入植。  
しかし、荒蕪地の開墾に手がかかり、湧水量が減少し生産力も低下、更に農作物の世界的豊作で価格が下落したため、  
農民の3分の2が去る結果となってしまった。Ibid. pp.12-13.
- (9) Ibid. pp.12-13.
- (10) Ibid. pp.16-17. 加藤完治 『日本農村教育』 東洋図書株式会社 1939年 p.185, p.197.
- (11) 昭和7年に東宮は「在郷軍人ヲ以テ吉林屯墾軍基幹部隊ヲ編成シ吉林省東北地方ニ永久駐屯セシムル件」という具  
申書をまとめる。その屯墾軍の目的は、①治安の任に当たること。②資源の開発。③ソビエト軍に備えること。である。  
上 op.cit. p.15.
- (12) Ibid. pp.19-21.
- (13) いわゆるホームシック。慣れない環境、現地人の襲撃、娯楽の欠如などで、開拓団また、義勇軍内にも蔓延した。  
Ibid. pp.22-24.
- (14) Ibid. pp.25-26.
- (15) 東宮が滿洲事変のおりに貰った御下賜金を資金として、国民高等学校から14名の少年を選抜し、滿洲の東部、饒河  
に試験移民させた隊。この隊はのちに義勇軍ができると、その訓練所のひとつに改編された。Ibid. pp.27-35.
- (16) 生徒の一人、相田寅男が何者かにも狙撃された事件があった。Ibid. p33.
- (17) Ibid. pp.34-35.
- (18) Ibid. p.36-39, p.42.
- (19) 村上隆夫『国策 滿蒙開拓青少年義勇軍始末記』日本図書刊行会 2001年p.43.
- (20) 元義勇軍兵士、斎藤兵一からの聞き取りによる。
- (21) 上 op.cit. p.37.
- (22) Ibid. pp.42-43.
- (23) Ibid. p.56.
- (24) Ibid. pp.56-57.
- (25) Ibid. pp.56-57.
- (26) Ibid. p.51.
- (27) Ibid. pp.75-77, pp.87-92.

- (28) 元義勇軍兵士、斎藤兵一からの聞き取りによる。
- (29) 上 op. cit. p. 51.
- (30) Ibid. p. 62.
- (31) Ibid. p. 62.
- (32) Ibid. pp. 22-23, p. 33.
- (33) しかし、中国大陸においては「軍」の文字ゆえに人民から正式な軍と認識されるので、関東軍の申し出により、「隊」の字を使った。それは少年たちの憧れの裏切りであった。Ibid. pp. 2-3, p. 44
- (34) Ibid. p. 49.
- (35) 元義勇軍兵士、斎藤兵一からの聞き取りによる。
- (36) 上 op. cit. p. 43.
- (37) Ibid. pp. 75-77.
- (38) Ibid. pp. 75-77, pp. 84-92.
- (39) Ibid. p. 95.
- (40) 清水久直 『滿蒙开拓青少年義勇軍概要』 明治図書 1941年 pp. 115-116.
- (41) Ibid. pp. 116-117.
- (42) 新村出編 『広辞苑第五版』 岩波書店 1998年 p. 2458.
- (43) Ibid. p. 2458.
- (44) 井上輝子他 Op. cit. pp. 436-437.
- (45) Ibid. pp. 436-437.
- (46) Ibid. p. 102.
- (47) 大阪府中等学校校外教護連盟 『青年の性生活に就て』 大阪府中等学校校外教護連盟 1932年 p. 21, pp. 15-16, pp. 27-28.
- (48) 大日本総合婦人会 大日本総合女子青年団編 『結婚と婦人常識』 大日本総合婦人会発行 1936年. pp. 18-19.
- (49) Ibid. p. 9.
- (50) Ibid. p. 12.
- 伊福部 隆彦 『完全なる夫婦道直筆四十八手』 大学書院 1938年 pp. 10-11.
- (51) 上 Op. cit. pp. 22-24, pp. 144-148.
- (52) Ibid. pp. 84-95.
- (53) 元義勇軍兵士、長田末作からの聞き取りによる。
- (54) 元義勇軍兵士、長田末作からの聞き取りによる。
- (55) 上 op. cit. p. 96
- (56) 加納実紀代 『わたしの《銃後》』 (株) インパクト出版会 1995年 p. 72.
- (57) Ibid. p. 72-73.
- (58) 祖母一山口明子(寮母の第四期生)からの聞き取りによる。
- 「慰問文で、親にも言えない辛いことを言ってきた。人殺しがあった、けんかがあったなど。」
- (59) 饒可少年隊こは、辻清恵という52歳の婦人が寮母として来任している。上 op. cit. p. 31.
- (60) 大阪府中等学校校外教護連盟 op. cit. p. 13.

- (61) 大日本総合婦人会 他 op. cit. pp. 12-13.
- (62) 伊福部 op. cit. pp. 14-20.
- (63) 祖母—山口明子(寮母の第四期生)からの聞き取りによる。
- (64) 上条なつ『道ありき 学位なしで女医になるまで』文理書院 1964年. pp172-173.
- (65) Ibid. p118. 上 op. cit. p. 96.
- (66) 祖母—山口明子(寮母の第四期生)からの聞き取りによる。
- (67) 清水 op. cit. p. 118.
- (68) 祖母—山口明子(寮母の第四期生)からの聞き取りによる。
- (69) 祖母—山口明子(寮母の第四期生)からの聞き取りによる。
- (70) Ibid. pp. 40, 44.
- (71) Ibid. pp. 52-53, pp. 71-72, pp. 80-83.
- (72) Ibid. p. 116.
- (73) Ibid. pp. 119-120.
- (74) Ibid. p. 119.
- (75) 元義勇軍兵士、長田末作さんからの聞き取りによる。
- (76) 「愛国婦人会の歓待を受けた、新京で日本人の大歓待を受けた」  
祖母—山口明子(寮母の第四期生)からの聞き取りによる。
- (77) 元義勇軍兵士、長田末作さんからの聞き取りによる。
- (78) 上 op. cit. p. 96
- (79) 祖母—山口明子(寮母の第四期生)からの聞き取りによる。
- (80) Ibid. pp. 139-143, pp. 155-168.
- (81) Ibid. pp. 172-173.
- (82) 元義勇軍兵士、斎藤兵一さんからの聞き取りによる。

#### 参考文献

- 加藤完治『日本農村教育』東洋図書株式会社、1939年
- 上笠一浪『滿蒙開拓青少年義勇軍』中公新書、1974年
- 上条なつ『道ありき—学位なしで女医になるまで』文理書院、1964年
- 清水久直『滿蒙開拓青少年義勇軍概要』明治図書、1941年
- 拓務省拓務局 『北滿の移民地を視察して』、1938年
- 大阪府中等学校校外教員連盟『青年の性生活において』大阪府中等学校校外教員連盟、1932年
- 大日本婦人会 大日本総合女子青年団 編『結婚と婦人常識』大日本総合婦人会発行、1936年
- 伊福部隆彦『完全なる夫婦道—軍四十八手』大文字書院、1938年
- 加納実紀代『わたしの(銃後)』(株)インパクト出版会、1995年
- 井上輝子、江原由美子、加納実紀代、上野千鶴子、大沢真理 編『女性学事典』岩波書店、2002年
- アルザ新島主催講座「憲法を変えて戦争に行こう、という世の中にしないための7回講座」

第2回「女は戦争の被害者か」において講師 加納実紀代によって配布されたレジュメ、2005年  
新村出編『広辞苑第五版』岩波書店、1998年  
村上隆夫『国策 満蒙開拓青少年義勇軍始末記』日本図書刊行会、2001年

#### 聞き取り調査

山口（旧姓今井）明子 1915年1月26日生まれ。本籍地 福井県三方郡三方町八村 最終学歴 高等女学校  
長田末作 1925年5月28日生まれ。本籍地 新潟県岩船郡荒川町荒島 最終学歴 高等小学校  
斎藤兵一 1931年2月10日生まれ。本籍地 新潟県白根市（現新潟市） 最終学歴 高等小学校

（卒業論文指導教員 松本 ますみ）